

岐阜県嚥下障害研究会

モグモグ通信

No. 11 (2008. 3 発行)

研究会もなんと
とか 10 歳にな
りました。
これからの研
究会の成長も
皆様のおかげで。



発行所: 岐阜県嚥下障害研究会
事務局: 木沢記念病院 ST室

岐阜県嚥下障害研究会 発足 10 周年を迎えて



会長 豊島 義哉

木沢記念病院
総合リハビリ 課長
言語聴覚士

この度、第 10 回学術講演会を迎えることができましたことを、役員ならびにスタッフの皆様の強い願いから起こる取り組みと、会員の皆様のご支援とご協力の賜と厚く御礼申し上げます。思い起こせば、平成 6 年に日本摂食・嚥下リハビリテーション学会の前身である「摂食・嚥下リハビリテーション研修会」が東京で開催され、以降、摂食・嚥下の機能評価法や機能にあった食形態の検討、口腔ケアの必要性そして訓練方法などが報告されるようになってきました。そのような流れのなか、9 年前の平成 10 年、岐阜県内では摂食・嚥下障害児者への「食べること」への積極的な取り組みを行っている病院や施設は少なく、対応方法も試行錯誤の状態のなか、医療、保健、教育、福祉などの関係職種が摂食・嚥下障害の理論と実際について研修および意見交換をし、摂食・嚥下障害児者の QOL の向上に貢献できるようにとの強い願いから、8 月 30 日、大垣市のソフトピアジャパンで 400 名を超える関係者が集い、岐阜県嚥下障害研究会を発足させました。以降、学術講演会と初級課程講習会を年 1 回開催、加えて系統的学習を図るために小児部門と成人部門の 2 つの領域に分かれてそれぞれ年に 4~5 回の研修会を開催し、徐々に力を付けて参りました。現在では会員数も 400 名を超え、小児・成人領域それぞれにおいて摂食・嚥下リハビリを積極的に取り組める病院、施設、学校も増え、当研究会の活動がその

一助を担えたのではないかと考えています。

4 年前、中日新聞の読者からの投稿欄に以下のような文章を見つけました。

独り暮らしの母と同居したのは十年前。働く私を助けて家事をする母をねぎらうと「面倒をみてもらうための貯金をしているんだよ。でも、延命治療はしないで」が口癖でした。元気だった母ですが 2002 年 1 月 2 日、不整脈の治療で入院中、脳梗塞を発症して、食べることも飲むこともできず。言葉も失ってしまいました。おなかから胃へ管を通す「胃ろう」のまま。三ヵ月後には老人保健施設へ。そこでうけた手厚い看護と介護をお伝えしたく手紙を書きました。母は一年あまり胃ろう栄養でしたが「口から食べさせてあげたい」という私たち家族の意向に。お医者さまは「やってみましょう」と一言。経口摂取のチャレンジは、おやつから。看護師さんがゼリーやプリンを細かく砕き、少しずつスプーンですくい、母の舌の上に載せて下さいました。最初の一口を飲み込んだとき母の顔に、にこやかな表情が浮かび、すごうれしかった！ 話すことも泣き笑うこともできない母なのに、味が分かるんだ、と。看護師と看護助手のみなさんに私たち家族も力を合わせて、母の経口摂取は進み、次はミキサー食へ、さらに刻み食へ。・・(中日新聞、2005 年 1 月 12 日、朝刊、生活 21 より引用)。

このお手紙は、嚥下リハビリに携わる者として、とても励まされる内容でした。当研究会は、これからも、「誰もが、好きなものを、いつまでも、おいしく、食べられるように」を目標に、病院、施設、学校、在宅スタッフとの連携を取りながら、摂食・嚥下障害児者の皆様、関係職種の皆様と一緒に一歩ずつ前進できるよう祈念して、研究会発足 10 周年の挨拶とお礼の言葉にかえさせて頂きます。



場 所 : 木沢記念病院 中部療護センター
 内 容 : 「高齢者の嚥下障害とその予防」
 講 師 : 長縄 伸幸氏
 (鵜沼中央クリニック 理事長)



大きな視野で患者様に接することができるように

木沢記念病院 言語聴覚士 吉田充千穂 (理事)

9月29日に行われた成人勉強会にて“高齢者における摂食嚥下障害”についてサンバレーかがみ野の長縄先生が講義をしてくださいました。

講義では大脳生理学から嚥下リハビリへと多岐にわたり、最近の見解を含め大変興味深い内容でした。

脳科学から見た認知症とその対応の話では、どのような経過をたどって脳が変化していくかをニューロンの単位から大脳レベルまでにわかり説明をしてくださいました。今までの知識がうまく整理でき、繋がらなかった個々の情報が関連した



1つの知識になったように思います。また脳での気質変化は、軽度認知障害が出現する20年前からおきてお

り、長期の無症状期があるということや、運動量がアルツハイマーの症状と関係があるとこと、また日常生活との関係性があることを知りました。

また経管栄養に話では PEG の造設や手術の仕方や合併症の話を知ることができました。当院でも積極的に嚥下リハビリに取り組んでいますが、必要な栄養の全てを経口で確保することが難しく、代償的な手段を用いざるを得ない患者様がいます。また経口摂取までに時間を要する場合にも栄養の確保のためにも代償的な手段を使用します。今回の講義では、その代償的な手段がどのような作用を引き起こしているか、またどんな利点や欠点があるのか、PEG 増設(手術)についても詳しく聞くことができました。改めて臨床での様子と知識が繋がり、嚥下機能だけではなく、摂食や栄養状態、補助栄養等も含めた視野で、診られるようになったように思います。

今後も大きな視野で患者様に接することができるように、知識を習得していきたいと思ひます。貴重なご講演をありがとうございました。

ブラッシングの基本テクニック 其の壱

ブラッシング・・・表情の観察・声かけを忘れずに。

えんぴつ持ちで軽く握り、歯と歯肉の境目に毛先を当て、小刻みに左右に振動させる様に、又は小さく円を描く様に磨きます。(耳の掃除の時のような感じで)

磨く圧力は軽いタッチで。強く磨いても汚れは取れません。歯ブラシは随時ゆすぎながら汚れを落とし、余分な水分は切ってから使用。

- 1) 咬み合わせの状態を外側から磨く、開口してもらわない必要はない。
- 2) 開口してもらい、内側を磨く、下からの方が磨きやすい。歯ブラシの毛先部分を使い、縦に磨いてみましょう。

3) 咬み合わせを磨く。

咬反射がある場合は歯ブラシを咬ませないよう注意する
*注意 磨く順序はあくまで基本的なもので、対象者の状況に応じて臨機応変に対応してください

ブラッシング困難等で対処できない場合は専門家に相談しましょう

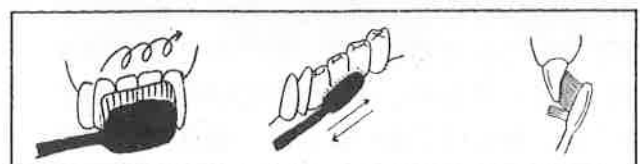


図 ブラシの当て方

小児勉強会 レポート



虹の架け橋へ 第一歩

名古屋医専（仮称）視能療法学科 浅野紀美江

「嚙下障害研究会の皆様、私は視能訓練士第13号ですが、どんな専門職かご存知ですか?」「初めて聞いた、名前は知っているけれど良くわからない!」残念ながら病院関係者でも、まだ知名度が低いのが現状です。1971年に国家資格となり、本年9月末現在6,948名の有資格者が眼科病院や医院で、人々の人生における視機能のすべてをサポートするエキスパートを目指して活躍しています。また、チーム医療の一員として視活動を通して心身の健康に寄与す

べく主に院内で仕事をしています。業務の中心は医師の指示の下診断や治療に必要な検査、治療・手術前後・経過中の検査、しかも

科内で業務がほぼ完結するので何時も多忙ですが、質の高い検査員的要素が強いのが特に最近の特徴といえます。

さて9月29・30両日、恵那市養護訓練センター「にじの家」を会場に木村順先生の「育てにくい子にはわけがある」のご講義、ワークショップが開催され私は幸運にも勉強会、懇親会・宿泊すべて参加が叶

いました。ご講義の内容は先生のお人柄をはじめ参加者の夫々が、抱えて余るほど持ち帰られたことと思います。

歴史ある嚙下障害研究会にORTは初デビュー?今後ORTが療法士として真に仲間入りできるのか検査員の道を歩むのか。当然医療専門職として資質・力量が問われます。先生から「視能訓練士(ORT)は検査員」とご指摘を受けました。それを真摯に受け止め浅野流に考察すれば、例えば視反応の乏しい乳幼児が眼科に受診、検眼鏡的所見でDrは「眼球には異常はないですよ」医学的所見を述べているのです。中枢神経異常を含めて認知の評価は医療側では関心が及ばないのです。前任G大学の講義で乳幼児の発達に触れましたが、視覚の面から捉えた授業まで展開できていません。医学部4年生は感覚器、耳鼻科学2週間、眼科学2週間のみ!



現在ORT養成校にありますが

(来春開校)、良い臨床家を育て社会に輩出する責務があります。今回音楽療法士加藤女史の紹介で「にじの家」に寄せて頂いたそのご縁が、今回の参加に繋がりORTの未来への虹の架け橋になりました。第一歩ですが今後共どうぞ宜しくお願い致します。

最後に講師の木村順先生はじめ会の準備、会場設営、司会進行、後片付け全ての関係各位の先生方本当に有難うございました。素晴らしい景観と参加者の温もりと美味しい料理・盛り上がった宴会の全てに、この場をお借りして御礼を申し上げます。

ブラッシングの基本テクニック 其の式

開口拒否・開口困難の方への対応・・・違いを見極める

拘縮・麻痺等による開口困難なのか?強い拒否による開口拒否なのか?

脱感作が必要な時・・・口腔周囲の筋肉から緊張をほぐし、和らげます。下顎から触れます。(上顎前歯部は過敏部分です。)末端から中枢へゆっくと触れていきます。

歯肉出血が顕著な方への対応

口腔粘膜等の傷による出血でなく、歯肉炎による出血であれば、少量は仕方がないが、粘膜は弱くなっている為傷をつけないよう注意して磨きましょう。改善しない場合は歯科医、歯科衛生士に相談をしてください。

初めのうちはやわらかめの歯ブラシを使用するとよいでしょう。ケアの最後に止血を確認してください。

第10回学術講演会・総会 会場



▲ 分かりやすい特別講演でした。

開催日 : 平成19年12月9日(日)

会場 : セラミックパークMINO(多治見市)

特別講演 : 「食支援を考える」
～小児期・成人期・老年期を通して～
講師: 向井 美恵(ヨシハル)先生
昭和大学歯学部 口腔衛生学教室 教授

企画 : 口腔ケア体験コーナー

教育講演 : 「摂食・嚥下リハビリテーションの実際」
～嚥下リハビリの進め方と使える訓練法～
講師: 豊島 義哉
岐阜県嚥下障害研究会長(木沢記念病院)



▲ 歓迎会での向井教授



▲ 満員御礼な講演会会場



▲ 受付での風景



▲ 大賑わいの書籍販売



▲ 恒例となった口腔ケア会場



▲ スタッフ一同です。

— 編集後記 — 今回は学術講演会・総会抄録集より多くを掲載させていただきました。仕事の都合などで残念ながら会場にいけなかった方も少しは雰囲気を感じていただけたでしょうか。研究会も皆様方のご協力により10周年を迎えることができました。今後も会員皆様のパワーが研究会の発展、そして各対象者のQOLの向上に繋がるかと思えます。他職種にわたる本研究会の結束力に期待します。(文責: 西美濃厚生病院 岡村)